

# 読上競技コレクション #7

## 安宅之関モデル〈上〉

北海道 西村 友幸

2015年の春、私は文庫本の新刊を手に入れるために、自宅から7kmほど離れたコーチャンフォー釧路店へと車を走らせた。コーチャンフォーはCoach & Fourで、これはつまり「四頭立て馬車」を意味している。釧路市内に本社を置く株式会社リアブルが運営しており、書籍、文具、音楽・映像ソフト、それにカフェの4業態をミックスした商業施設である。

お目当ての新刊のタイトルは『幸四郎の奇跡のはなし』。著者は歌舞伎俳優の松本幸四郎(九代目)である。新聞の新刊広告でこの本の発売を知ったとき、私は不思議な感覚に襲われた。というのも、ちょうどそのころ、私の父の西村幸四郎が晴れて退院できることが決まったからである。父は前年の秋から体調を崩して入院生活を送っていた。絶妙なタイミングで絶妙なタイトルの本が出たものだ。後年になってから新刊広告の掲載日を新聞縮刷版で確認したところ、2015年4月2日だった。掲載がもう1日早ければ、冗談か何かと思って見過ごしていたかもしれない。

買ってきた文庫本のページを家でめくりはじめた。「ああそうか!」。多年の疑問が一気に氷解した。私は2010年から継続している珠算の研究ノートにこう記した。

15・4・6 勸進帳

勸進帳という萌芽的アイデアが本格的に花開くまでにはさらに2年半を要した。ここに「あとかのせき安宅之関モデル」の名でその成果をお披露目する。

読み手のための読上競技

「勸進帳」の三文字で氷解した多年の疑問とは、読み手のための読上競技から、このタイプの競技に必須と思われる審査員をいかにして取り除くことができるか、というものである。

読者の中には、特に若手を中心に、たった今私が述べたことに驚きを感じる方がいらっしゃるかもしれない。「読み手のための読上競技」がすでにあって、今般それに手直しを加えるかのような書きぶりではないか。

事実そのとおりなのである。「読み手のための読上競技」は実在する。というよりも過去に実在した。全国珠算教育連盟主催の“読みコン”こと『珠算読上コンクール全国大会』である。

私の手許には、昭和54年度珠算読上コンクール全国大会のパンフレットがある。父から借りたものである。それによると、コンクールの出場者10名はおのおの、規定問題と自由問題を1題ずつ読み上げる。それぞれを審査員(正式名称は審査委員)が50点満点で採点する。誤読や規定秒数からの±2秒超の逸脱は減点となるほか、聞き易さ、マイクの通り、発声法、呼吸法、リズム(流れ)の5項目にわたって読み手のパフォーマンスが評価される。審査委員が何名なのかはパンフレットからは分からないが、体操やフィギュアスケートといった異分野の採点競技と同様に「審査委員の得点の計算は各委員のうち、最高・最低の2評点を除いた得点合計の平均点とする」ことが明記されている。

出場者10名中、高得点者2名が決勝に進出して

頂点を競う。昭和 54 年度大会のファイナリストの一人は長野県支部所属の選手。もう一人は道央支部所属の西村幸四郎選手。大会の様子が収録されたビデオは、その昔実家の居間で父と一緒によく見た。父がビデオを見ていたのを傍らで見ていたと表現するほうが的確か。決勝で長野県支部の選手が問題を読み終えると、会場は割れんばかりの拍手に包まれた。何しろ、昭和 54 年度大会は長野市民会館を会場にして開かれたのだ（ゆえに、大会パンフレットの表紙には北アルプスと善光寺の写真が使われている）。

はたして、優勝の栄冠は西村幸四郎の頭上に輝いた。父はアウエーで勝利したのだ。これもまた“幸四郎的奇跡のはなし”なのかもしれない。

### ジャッジレス化

再びパンフレットを参照すると、珠算読上コンクール全国大会という名称が使われはじめたのは昭和 52 年の第三回大会からである。初回と第二回大会の名称は『読上算のど自慢コンクール大会』。旧称はより明確に、読みコンがNHKの歌番組にヒントを得たことを物語っている。実は、長野県で開催された読みコン第五回大会の審査委員長は宮田輝氏。大学卒業後、NHKに入局し、1946 年から通算 21 年間『のど自慢素人演芸会』（現：『NHK のど自慢』）の司会を務めた（Wikipedia を参照。最終アクセス 2020 年 10 月 11 日）。

そうした事情があるので、読みコンに審査委員ジャッジがいたことは少しも不思議ではなく、むしろ当然といってよい。審査以外に読み手のパフォーマンスを評価する方法などあるのだろうか。換言すれば、本コレクションで置き手のための読上競技から読上委員を取り除いてきたように、読み手のための読上競技を“ジャッジレス化”することは可能なのか。本コレクションの #1 「一人二役モデル」はジャッジレス化されているものの、競技者の「読む力」だけでなく「置く力」も測っているので、純粋に読み手のための読上競技とはいえない。読み手としての能力のみを、ジャッジ

レスで計測するにはどうすればよいか。この問いはおそらく、「読上競技は一人二役で」を脱稿した 2010 年 4 月ごろまでには私の心中に芽生えていたはずである。「勸進帳」という答えを『幸四郎的奇跡のはなし』の中に見出したのは 2015 年 4 月 6 日のことである。問題を解くのに丸 5 年かかった計算になるが、一人二役モデルの開発期間は本コレクションの #1 で言及したとおり 17 年だったので、能率は格段に向上したといってよい。

### 勸進帳読上

『幸四郎的奇跡のはなし』の著者である九代目松本幸四郎さん（2018 年 1 月に二代目松本白鷺を襲名）が、16 歳で初挑戦してから半世紀以上にわたり、通算千回以上も演じてきたのが『勸進帳』の武蔵坊弁慶役である。『勸進帳』は能の演目『安宅』を元につくられており、あらずじは以下のとおりである。

兄・源頼朝の逆鱗に触れた源義経は、家来の弁慶らと逃避行の旅に出た。北陸道の安宅之関でのこと。山伏に変装して通り抜けようとする一行に、関守の富樫左衛門は勸進帳を読むよう命じた。弁慶はたまたま持っていた巻物を勸進帳に見立て、即興で朗々と読み上げた（勸進帳読上）。ピンチは切り抜けられたかに思えたが…。

読み手のための読上競技において、競技者すなわち読み手が、白紙を受け取っているながらあたかもそこに読上算の問題が書かれているかのように朗々と読み上げれば、それは「勸進帳読上」である。偽装を見破る関守役は第三者ではなく対戦相手が務める。そうすればジャッジレス化という目標を首尾よく達成できるではないか。

幸四郎つながりで『勸進帳』と『珠算読上コンクール全国大会』、略して“読みコン”とが結びついた瞬間、私の脳裏に以上のようなアイデアが閃いた。このアイデアを 2 年半ほど温め、2017 年 11 月、「安宅之関モデル」が遂に完成した。

はなしの続きは次回へ譲る。

（小樽商科大学大学院教授）